

國立臺灣大學醫學院附設醫院
National Taiwan University Hospital
2026 年度 留学報告書



福島県立医科大学 医学部 6 年 日下 真帆

はじめに

このたび私は本学の「国立台湾大学協定派遣プログラム」のもと、国立台湾大学附属病院 (NTUH ; National Tiwan University Hospital) に留学し、BSL アドバンスコース後半期間の 2026 年 6 月 22 日から 7 月 17 日までの 4 週間、臨床実習に参加させていただきました。本稿では、留学中に経験したことや感じたこと、学んだことを失敗談も含めてまとめました。本プログラムや海外留学に興味のある方、国立台湾大学附属病院や台湾の医療に関心のある方だけでなく、漠然と何かに挑戦してみたいと考えている方にとっても、このレポートが少しでもご参考になれば幸いです。

目次

1. プログラムについて
2. 留学の目的と背景
3. 国立台湾大学附属病院について
4. 実習内容
 - 4.1. Medical Oncology
 - 4.2. Radiation Oncology
 - 4.3. Emergency Medicine
5. 実習外での生活・課外活動
 - 5.1. 宿泊先について
 - 5.2. 交通機関について
 - 5.3. 食事について
 - 5.4. NTU 医学生との交流
6. 留学準備
 - 6.1. 語学
 - 6.2. 服装・持ち物
7. 終わりに:成果と今後の展望

1. プログラムについて

本プログラムは、昨年 10 月頃に掲示板にて案内され、応募および選考会を経て 11 月頃に留学が決定しました。プログラムへの参加にあたり、留学先との交流事業への積極的な参加や、留学手続きの円滑な進行、帰国後の報告等の採択要件があります。この留学報告書も要件の一つとなっています。一方で、英語能力に関しては面接時に評価されるものの、TOEFL などの検定試験結果は要件に含まれていません。そのため、留学したいという強い意志と目的があれば応募は可能です。もし語学力が理由で応募を悩まれているのであれば、まずは面接に挑戦してみてください。とはいえ、基本的な英語力は当然必要なので、普段から勉強しておくことをお勧めします。

国立台湾大学附属病院(以下 NTUH)への派遣プログラムでは、1 診療科ごとに 2 週間以上の実習を基本として希望診療科を選択することができ、希望と受け入れ状況に応じて実習する診療科が決定します。特定の診療科に関して興味がある方には、選択の自由度の面でも非常にお勧めです。

2. 留学の目的と背景

私が本プログラムに応募したきっかけは、昨年の秋ごろに NTUH からの交換留学生と交流したことです。すれ違いざまに数回立ち話をしたり、連絡先を交換したりした程度でしたが、日本の文化や医療に興味を持ち、まさに挑戦している同年代の姿に感化され、そこからプログラムについて詳細な情報を集め始めました。以前から語学が好きで留学にも興味があったものの、なかなか行動に移せなかった自分を振り返り、「挑戦して何か変えたい、この機会を利用するほかない。」という思いから応募しました。県内で各診療科の臨床実習を終えたタイミングでの留学のため、日本・福島と海外の医療や臨床現場を比較し、さらには現地の学生との交流や意見交換を通じて視野を広げる良い機会になると考えました。そこで留学にあたり、私は以下の 3 つの目標を掲げました。

【留学目標】

- ① 日本と似た国民健康保険制度を有する台湾において、実際の医療提供体制について学び、日本や福島との違いを比較する。そのうえで日本の医療の課題や長所を理解し、将来的に地域医療やプライマリケアなどの場面で具体的にどのような役割を担うことができるか検討する。
- ② 台湾で医学を学ぶ同世代の医学生と交流し、医療や将来に対する考え方を意見交換し、文化や医療について比較して学びを深める。
- ③ 英語力を向上させ、日常生活会話だけでなく、臨床で使える英語表現を学ぶ。

3. 国立台湾大学附属病院について

ここでは留学先の NTUH について簡単に紹介します。すでに過去の留学報告で NTUH に関する歴史や規模などが紹介されているため、より詳細に知りたい方はそちらも参考にしてください。

NTUH は日本統治時代の 1895 年に設立され、130 年以上の歴史を持つ台湾を代表する大学病院のひとつです。台北市にある本院は、西棟(表紙の画像)、東棟、小児棟の 3 つの棟からなり、今年 7 月 27 日より新たに健康増進棟の試験運営が開始されました。なかでも西棟の建物は創設当時の日本人建築家により設計され、内部もほぼそのままでの状態で使用しているため歴史的価値が高く、台北市指定古跡となっています。NTUH の病床数は約 2,600 床、1 日の平均外来患者数は約 8,000 名であり、これは福島県立医科大学付属病院(令和 7 年度; 病床数 778 床、1 日平均外来患者数 1,453 名)と比較するとかなり大規模であることが分かります。また、本院に併設した医学部キャンパスのほかに台北市大安区にメインキャンパスがあり、加えて 4 つの分院(新竹、雲林、北護、金山)と 1 つのがんセンター(NTUCC; National Taiwan University Cancer Center)を有しています。今回の留学では主に本院の西棟と東棟で実習させていただき、NTUCC も見学させていただく機会がありました。

余談ですが、実習でお世話になった先生のお話によると、NTUH の歴代院長は循環器内科や心血管外科の教授が 3 代続けて務めていたことがあり、「NTUH は Cardiology が有名な病院」として認識されているそうです。



左: 東棟の正面から撮影。

右: 小児棟。内装も可愛い壁紙でした。

4. 実習内容

私は腫瘍診療や放射線治療に興味があったため、日本では比較的新しい領域である腫瘍内科について日本と台湾を比較し、腫瘍内科医・放射線治療医の役割やがん患者様との関わり方について学びたいと思い、Oncology を選択しました。NTUH では、Oncology が Medical Oncology と Radiation Oncology の 2 つの部門に分かれており、今回は 1 週間ずつの臨床実習をさせていただくことになりました。

また、救急診療科は選択要件に「中国語を話せること」とあったため選択を躊躇していたところ、スタッフの方々とは英語で対話可能であるということや、「日本とは全く異なる救急現場を観察できるため学びが多い」ということを先輩からアドバイスしていただき、日本と台湾の救急医療体制の違いを学びたいと思い選択しました。

全体のスケジュールとしては、1週目に腫瘍内科(Medical Oncology)、2週目に放射線腫瘍科(Radiation Oncology)、3・4週目に救急診療科(Emergency Medicine)で実習しました。

4.1. Medical Oncology

腫瘍内科のローテーション期間では、呂理駿先生(Dr. Li-Chun Lu)のご指導のもと、先生のご専門である肝細胞癌や消化管癌の患者様を中心に、診療見学させていただきました。主な実習内容は、Ward teaching(病棟回診)、Out patient(外来見学)、各レクチャー(全4回)の参加、化学療法室見学、臨床試験に関する会議への参加見学です。

腫瘍内科の病棟および外来は歴史ある西棟にあり、腫瘍内科の患者様は全部で5つの病棟にいらっしゃるということでした。私が見学した週は、呂先生の担当患者様が12名ほど入院されており、Ward teachingでは先生にとともに回診しました。一人一人の患者様やそのご家族に対して、症状や治療経過などについて時間をとって丁寧に対話している姿が印象的でした。空き時間には入院患者様の診療録を参照して情報を整理し、疑問があれば次の回診の際に注意して見学したり質問したりするようにしていました。

外来では、先生に英語で要約して教えていただきながら見学しました。患者様は50代から80代と様々で、複数の癌を併存して患っていたり、治療経過が複雑であったり、通常のレジメンとは異なる早期臨床治験に参加されていたりと、それぞれに異なる背景をお持ちの方々がいらしていました。治療経過全体に関する画像を用いた丁寧な説明や副作用に関する問診など、個々の患者様やご家族の疑問に応じてお話しされているのが印象的でした。また、NTUHが台湾随一の大学病院であるが故なのか、外来に訪れているほぼ全ての患者様やご家族の、病気や治療に対する関心がとても高いと感じました。

病棟実習・外来実習を通して、腫瘍内科医は、適切な治療レジメンを選択するだけでなく、副作用の管理、複雑な症状への対応、患者・家族とのコミュニケーション、他診療科との連携など、多方面から患者様を支える中心的な役割を担っていることを学びました。このような優れた包括的な診療体制を目の当たりにし、優れた腫瘍診療とは単に抗がん剤を投与することではなく、患者様の価値観や生活の質を尊重した医療を提供することであると強く実感しました。

右: 呂理駿先生(写真右)と、
ナースステーションでの1枚。



各レクチャーの議題は、それぞれ頭頸部癌、臨床倫理、消化管癌に関するもので、中国語(部分的に英語)のスライドを用いて中国語で説明がなされました。NTUHの実習生やPGY(日本でいう初期研修医)、レジデントが参加しており、私は同じ病棟でお世話になっていた先生に部分的に通訳していただきながら参加しました。日本と台湾の疫学的な違いについても触れられており、非常に興味深い内容でした。

化学療法室見学では、実際に治療を行うベッド上臥位の部屋と坐位の部屋の2タイプを見学し、使用されている器材についても紹介していただきました。

今回の実習で特に印象に残ったのが、臨床試験が日常の診療の中に非常に活発に組み込まれていたことです。NTUHには「Oncology Ward & Early Phase Clinical Trial Unit」という腫瘍患者に対する早期臨床試験を専門的に行う病棟が設けられており、実際に多くの患者様が臨床試験に参加している様子を見学しました。また、NTUHではPhase I、肺癌、乳癌・その他の固形腫瘍、消化器癌の4つのグループに分かれて臨床試験が実施されており、それぞれ20~30件程度の試験が進行しているそうです。私が今回参加した臨床試験ミーティングは乳癌およびその他の固形腫瘍に関するものでしたが、一つの大学病院でこれほど多くの臨床試験が同時に進められていることに驚き、NTUHにおけるがん研究と臨床応用の近さを実感しました。

4.2. Radiation Oncology

放射線腫瘍科実習では、患者様のシミュレーション(Positioning)、標的体積の設定、治療計画の作成に至るまで、放射線治療計画の各段階を見学したほか、Morning meetingや外来見学も参加しました。強度変調放射線治療(IMRT)などの先進的な技術を用いて、一人ひとりの患者様に最適化された治療計画が作成されている過程を学び、放射線治療の精密さと複雑さを実感しました。

数多くの学習機会の中で特に印象に残ったのはコンツォーリング(contouring:輪郭描出)の実習です。レジデントの郭承學先生(Dr. Cheng-Hsueh Kuo)のご指導のもと、Positioningの様子を見学させていただいた実際の患者様の治療計画について、標的体積の輪郭描出を行い、自分が作成した輪郭とそれに基づき作成された治療計画について、指導医の郭頌鑫教授(Dr. Sung-Hsin Kuo)に詳細なフィードバックをいただきました。この経験を通して、解剖学的理解、照射対象となる領域の設定、腫瘍への十分な線量確保と周囲正常組織の保護のバランスをとることの重要性を学びました。また、適切な放射線治療計画には、患者様それぞれの状態を考慮した臨床的判断力が必要であることを理解しました。



上:お世話になった先生方との1枚。

郭頌鑫教授(中央)、郭承學先生(右から2人目)、他のレジデントの先生方(両端)、放射線腫瘍科エリアの主任看護師の方(左から2人目)。

外来見学では、主に乳癌患者様の放射線治療の経過について、皮膚症状などの早期有害事象がないかを診察したり、治療による腫瘍の縮小の程度について、画像を用いて患者様やご家族に説明したりする様子を見学しました。日によっては午前だけでも 40 名近い数多くの患者様が受診していましたが、短い時間でもお一人ずつと丁寧に対話し、視診・触診による観察もされていたのが印象的でした。

さらに、国立台湾大学がんセンター (National Taiwan University Cancer Center: NTUCC) を訪問し、陽子線治療の機械や、それらが実際の臨床現場でどのように活用されているかを見学できたことも非常に貴重な経験でした。



左: NTUCC の一角にある放射線科学・陽子線治療センター。

…NTUCC は、台湾で著名な資産家である郭台銘氏による多大な寄付により建設された、寄贈施設だそうです。



左: 郭承學先生 (写真左) と陽子線治療室での 1 枚。

上: コンビニでよく見た「乖乖」のお菓子。

…各治療室の外にある操作室には、1 台につき 1 袋の「乖乖」という緑の菓子袋が置いてあり、「青信号で動作良好」という意味の御守りのようなものだそうです。



4.3. Emergency Medicine

救急診療科の実習期間中、台北市に台風が直撃したため、不要不急の外出を避けて実習が休日になった日もありました。その影響で NTUH 外での Out campus study は予定変更された面もありましたが、希望に応じて指導医の先生方が複数都市に同行させていただきました。

NTUH 内では主に蘇生エリアでの臨床実習を行い、重症患者が初期評価・安定化されるまでの過程を数多く見学しました。今回の実習スタッフの方々はとても仲が良く、普段から救急チームとして良好な関係性を築いているのだと感じました。残念ながら資格の関係上、留学生は手技などを経験できませんでしたが、同時期に実習中の現地学生は、周囲のスタッフの指導のもと、末梢静脈路確保や尿道カテーテル留置などの手技を行っていました。見学した多くの症例の中でも特に印象に残ったのは、院外心停止後に自己心拍再開を得た患者様に対して、治療的低体温管理療法が実施されていた症例です。日本での臨床実習では、心肺蘇生後の患者管理について実際に学ぶ機会が限られていたため、この症例を通して、脳保護を目的とした治療戦略や、蘇生後も継続する包括的な集中治療の重要性について理解を深めることができました。また、生命を脅かす状態に対して迅速に評価を行い、救急チーム全体が強調して対応する姿を通じて、迅速な意思決定とコミュニケーション、明確な役割分担が大切であると学びました。



左:実習最終日に、林鍵皓先生(右列中央)と救急外来のスタッフの方々と一緒に訪れた鼎泰豊での写真。小籠包がとても美味しかったです。

右:鄭銘泰先生との1枚。

さらに、NTUH 外で実施された災害医療訓練への参加も非常に貴重な経験となりました。林鍵皓先生(Dr. Chien-Hao Lin)と訪れた宜蘭市の羅東博愛病院(Lotung Poh-Ai Hospital)では、大規模地震後に集中治療室で火災が発生したという想定で、机上訓練および現場評価訓練に参加しました。人工呼吸器管理中の患者を迅速に水平避難させる方法、スタッフの役割分担、初期消火対応など、実際の災害時に直面する具体的な課題について議論されていました。この経験から、効果的な災害対応には、医学的知識だけでなく、綿密な想定と準備、明確な手順、組織的なチームワークが不可欠であることを実感しました。

加えて、鄭銘泰先生(Dr. Ming-Tai Jeng)とともに台南にある国立成功大学(National Cheng Kung University)を訪問し、放射線災害医療訓練への参加および救急部門の見学を行いました。福島第一原発事故の際の話にも触れつつ放射線災害の講義が行われ、放射線線量測定、防護具の装着などの実技訓練を通して、社会的影響が極めて大きい放射線災害に備える重要性を改めて感じました。



左:防護具の着用準備の様子。背景のスクリーンには、着用の手順が示されています。



右:防護具の脱衣を行っている様子。



左:一緒に防護具装着の実技に参加した救急救命士の方々との1枚。

ポーズは安全・良好を示す OK サイン。



左:引率してくださった鄭銘泰先生(写真左)と、国立成功大学の救急部門を案内してくださった高嘉隆教授(左から2人目)との1枚。

5. 実習外での生活・課外活動

5.1. 宿泊先について

事前に学生寮は利用不可との連絡があったため、Airbnbという民泊サービスを利用して MRT の中山駅 (Zhongshan St.) 周辺に宿泊しました。シャワー室とトイレが床続きの物件が多いため、特に注意して探しました。日本人をはじめとする観光客の多いエリアであり、治安は良いと思います。

5.2. 交通機関について

MRT を利用して、中山駅から 2 駅の台大医院駅まで通いました。中山駅から台北駅までは地下通路でつながっていて、地下街には多くのお店があるため、寄り道しつつ歩いて移動することもありました。また、私は今回利用しませんでした。街中のいたるところに YouBike という公共自転車が設置されており、登録すると外国人でも利用可能とのことでした。

5.3. 食事について

台湾は外食文化の国であり、家で自炊をすることはほぼないそうです。そのため毎日外食またはお弁当などを購入していましたが、気温が高いため食中毒には注意していました。屋台で販売されているものを食べる機会もありましたが、私を含めて周囲に体調を崩した人は出ませんでした。

平日の昼食は、西棟と東棟の地下 1 階のコンビニや食堂などを利用していました。西棟よりも東棟のほうが、広いエリアにたくさんのお店があるためお勧めです。患者様も利用するためとても混雑していますが、職員や学生は食堂の奥にある専用のスペースを利用することができます。

料理によりませんが、辛さの程度の表記感覚は日本のお店とほぼ変わらないので、注文した料理が特別辛すぎるといったことはありませんでした。

5.4. NTU 医学生との交流

残念ながら今回私が実習した診療科では、同時期に実習中の学生が少なく、スケジュールや場所が重なることもあまりなかったため、交流の機会は非常に限られていました。しかし、一緒に台湾留学した中川さんの紹介で、実習外では NTU の医学生と交流することができ、週末に観光地と一緒にいたり、食事に行ったり、メインキャンパスでバドミントンをして一緒に汗を流したりと、様々な交流機会を得ることができました。彼らとの雑談のなかで、現地の学生の将来に対する展望や、語学学習、医療、互いの国の文化などについても話し、同じく医師を志す同年代として非常に多くの刺激をもらいました。こうした人とのつながりができたことは、今回の留学を経て得た大きな宝物のひとつだと感じています。



上:最終日に現地の学生たちと撮影。

6. 留学準備

6.1. 語学

英語については、過去の留学報告書などを参考にしつつ、日頃利用していた海外の医療系 YouTube チャンネルや単語帳、本などで学習しました。しかし、NTUH の学生は英語で医学を学び、かつ診療録もほぼ全てを英語で記載するため、日常英会話のみならず実践的な医療英語の能力も総じて高く、学習量と質の違いを実感しました。そのため留学先では、実習のなかで分からない単語はメモして調べたり、先生に直接聞いたりすることで、日々勉強していました。NTUH では、医師だけでなく看護師などのその他のスタッフの方々も、簡単な英会話であれば英語が通じるため、積極的にコミュニケーションをとると良いと思います。

また、患者様やご家族とのやり取りは全て台湾華語であるため、会話が理解できず、先生方に英語で要点を教えていただいていたいました。私自身、アプリを利用して中国語の勉強を進めていたが、会話ができるほどには至りませんでした。本来であれば台湾華語を事前にもっと学ぶべきところですが、英語も台湾華語もおろそかになるよりは、英会話能力の向上に注力することをお勧めします。

6.2. 服装・持ち物

6-7 月の台湾は、日差しが強く暑いため、基本的に上は T シャツで下は軽めのズボンという服装で過ごしました。通学中に必ず汗をかくため、トップスは 5-6 着ほど持参して 2 日に 1 度以上は洗濯していました。MRT 中は非常に涼しいため、カーディガンなどの羽織るものを常に持ち歩いていました。また、午前中は日差しが強く、午後は突然雨が降り出すという日が多いため、傘は常に持ち歩く必要があります。傘をさしていても、靴の中まで濡れてしまうほど雨足が強い日もありました。

NTUH の実習では「白衣を着用するように」との事前連絡があり、ケーシーの上に白衣を着て実習を行いました。後から知った話ですが、文字通り「白衣を着用」しさえすれば、学生なら中は T シャツでもよく、襟付きシャツならなおよいといった規定のようでした。着替える場所があまりないため、個人的には襟付きポロシャツなどを着て行き、そのまま白衣を上に着ると良いかと思います。

そのほか、役に立った持ち物を以下に列举します。

✧ トイレットペーパー

: 宿泊先のはティッシュのようなタイプだったため、1 ロール持って行って正解でした。

✧ 洗剤 (パーフェクトスティック・ジェルボールなど): 部屋干し用などあれば便利です。

✧ 洗濯ばさみフック: 靴下などの小物類を干すのに必要でした。

✧ 日傘・日焼け止め: 紫外線対策は必須です。台湾の方も日傘をさしていました。

✧ 薬: 虫刺されに悩まされたので、ムヒや抗ヒスタミン薬が役立ちました。

✧ 水筒: コンビニで飲み物を注文する際も、水筒持参だと割引されます。また、買ったドリンクが飲みきれないときにも、あると持ち歩きに便利です。

- ✧ ジップロック:MRT 中での飲食は禁止なので、食べかけのものを入れたり、頂いた果物を入れたり、重宝しました。
- ✧ 歯ブラシ:現地のホテルは歯ブラシの提供がないので、携帯することをお勧めします。
- ✧ 爪切り:1ヶ月も実習していると爪が伸びます。忘れたので現地で購入しました。

7. 終わりに:成果と今後の展望

今回の NTUH 留学を通して、事前に設定した3つの目標について、それぞれ貴重な学びを得ることができました。

第一に、台湾の医療提供体制を実際の臨床現場から学び、日本の医療について異なる視点から考えるきっかけを得ることができました。台湾には全民健康保険(National Health Insurance)という日本の国民皆保険制度に似た制度がありますが、医療制度や医療費の仕組みには異なる点があり、実際の医療現場では、その違いが患者様の受療行動や医療者の診療にも影響していることを学びました。また、腫瘍内科、放射線腫瘍科、救急診療科での実習を通して、制度そのものだけでなく、その制度のもとで医療者がどのように患者様やご家族と関わり、チームとして医療を提供しているのかを実際に見ることができました。例えば、がん治療薬や放射線治療のなかには全民健康保険の対象になっていないものが多く、数多くの患者様が Private Insurance を利用しているということを知りました。日本と台湾にはそれぞれ異なる特徴がありますが、どちらが優れていると単純に比較するのではなく、それぞれの制度や文化的背景を踏まえて医療を考えることの重要性を実感しました。

これらの経験を通して、将来地域医療やプライマリケアに携わる際にも、目の前の疾患だけを見るのではなく、患者様の生活背景や価値観、家族、地域とのつながりまで含めて考えられる医師になりたいという思いがより強くなりました。

第二に、台湾の医学生との交流を通して、同じく医師を目指す同世代であっても、育ってきた環境や文化、医療制度の違いによって、医療や将来に対する考え方には様々な視点があることを知りました。単に台湾の医療について知識を得るだけでなく、実際にそこで学ぶ学生と時間を共有したことで、台湾をより身近に感じることができました。今回できたつながりを一度きりの留学経験で終わらせず、今後も互いの国の医療や文化について情報交換できる関係として大切にしていきたいと思います。

第三に、英語については、実際の臨床現場で英語を使ってコミュニケーションをとる経験を積むことができました。先生方から英語で診療内容を説明していただいたり、分からない医学用語をその場で調べたり質問したりする中で、教科書で学ぶ英語とは異なる、臨床の場で必要とされる英語表現を学ぶことができました。一方で、NTUH の学生と比較して自分自身の医学英語の力にはまだ大きな課題があることも実感しました。今回の留学は、英語力を「身につけた」と言える段階ではなく、むしろ今後さらに学ぶべき課題を具体的に知る機会になったと考えています。今後も日々の医学学習の中で英語の文献や資料に触れ、将来、海外の医療者とも臆することなく意見交換でき

る力を身につけたいと思います。機会があればすぐに飛び込めるよう準備しておくというのは、少ない機会を逃さないために重要であると考えています。

振り返ると、今回の留学は、当初考えていた以上に多くのことを経験できた4週間でした。日本とは異なる医療制度のもとで実際に診療が行われている様子を見て、同世代の学生と交流し、英語を使って臨床現場に飛び込んだことで、自分がこれまで当たり前だと思っていたことを一歩引いて異なる視点から考えることができました。同時に、自分の知識や語学力、積極的にコミュニケーションをとる力など、今後伸ばしていくべき課題も明確になりました。

今回の留学で得た最も大きな成果は、特定の知識や技術を身につけたことだけではなく、「自分の外側にある医療や価値観を知ることで、自分がどのような医師になりたいのかを考えるきっかけを得たこと」だと思います。今回の経験を一過性のものにせず、この先に始まる初期研修、その後の医師としての生活の中でも、患者様や他職種、異なる文化や価値観を持つ人々との関わりを大切にしていきたいと思います。そして、今回の留学で得た視野と経験を、将来の地域医療や日々の診療に生かしていきたいと考えています。

謝辞

このたび、国立台湾大学附属病院への留学という貴重な経験をさせていただき、多くの方々に多大なるご支援とご協力を賜りましたことに、心より御礼申し上げます。

【国立台湾大学附属病院】

腫瘍内科	呂 理駿 先生
放射線腫瘍科	郭 頌鑫 教授
	郭 承學 先生
救急診療科	鄭 銘泰 先生
	林 鍵皓 先生
国際事務局	梁 凱勛 様
	廖 家慶 様

【福島県立医科大学】

薬理学講座	下村 健寿 教授
糖尿病内分泌代謝内科学講座	島袋 充生 教授
企画財務課	増井 奈津美 様

ならびに、NTUH で関わったすべての方々に、心より感謝申し上げます。